

江戸時代における「展示型見立て」

——開帳を模倣したイメージの展覧会——

チェ キョングクク
崔 京 国

はじめに

今回の日本文学研究集会のテーマは「〈場所〉の記憶——テキストと空間——」です。今から私が話すのは、開帳とそれをパロディした見世物やいわゆる見立てた戯作についてです。

開帳は江戸の人々の生活において重要な部分を占めていました。都市で行われた開帳に大勢の人が集まり、またそれを目当てに近くの広場で見世物が開かれました。そのような雰囲気の中から開帳をパロディーした見世物「とんだ靈宝」「おどけ開帳」が現れました。「とんだ靈宝」「おどけ開帳」は「見立て」が実際見世物として大衆の前で行われた点が興味深いのです。それが大当たりをとっているので、「見立て」が木戸銭を払ってまで見る価値があったということになります。

この現象が見世物に終わらず、戯作・浮世絵などにも描かれました。江戸戯作の中でも黄表紙にこのような見立ての表現が多く見られます^①。例を見ると『開帳』^②（図1）のように、題目が書かれた紙を貼って靈宝を展示し、観客を前に杖を持ってこの靈宝が靈験のあるものだと言明してする人（僧侶、あるいは袴姿の人）がいます。それを見ている人々は手を集めて「ありがたや、かたじきなや」と靈宝の利益を感謝している場面が描かれています。

このように靈宝（展示物）を観客に見せて口上によって説明するという「靈宝」「観客」「口上」の三つの要素を持つ見立てを「展示型見立て」と呼びたい

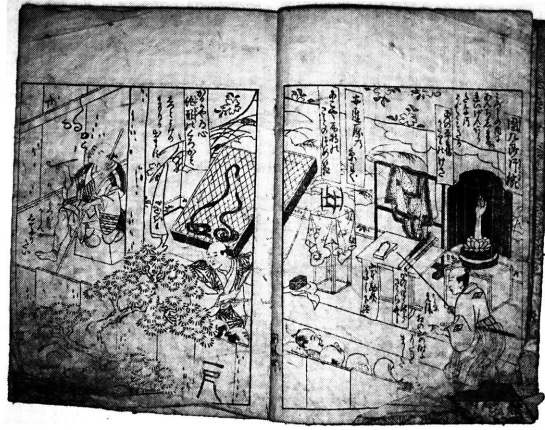


図 1

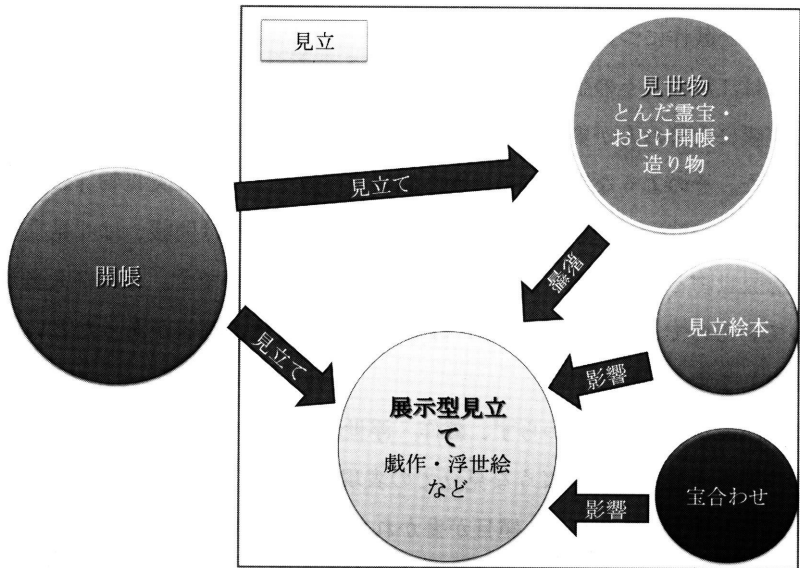


表 1

です。

「展示型見立て」においてなんの変哲もないものを宝として説明する方法は、当時の狂歌師たちの集まりから端を発した「宝合わせ」と類似しており、作り

方は『絵本見立百化鳥』（漕川小舟、宝暦5（1755）年）から始まる「見立絵本」からも影響を受けています。これらに関係図にすると次のようになります（表1）。

これから一つ一つ見ていきたいと思います。

とんだ靈宝

開帳が行われた寺を一步踏み出すとそこは盛り場でした。『嗟峨靈仏開帳志』^③（図2）に描かれた西蓮寺の前景を見ると、寺の前には店がずらっと並んでいます。

この開帳と見世物との関係は猿猴庵の記録以外にもよく見られることで、開帳を開く側としても見世物が開帳のにぎわいを支えたにちがいません。考えてみると開帳も一種の見世物であり、その見世物どうしが博覧会のようにひとつの場所で大規模に開かれるのも効果があったのでしょうか。江戸で一番これにふさわしいのが、宿寺としての回向院と両国広小路との関係です。この両国

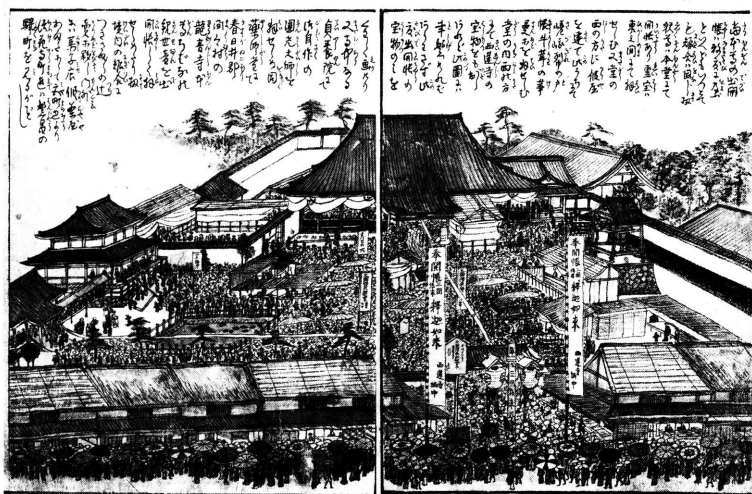


図 2

記録	目録	縁起	黄表紙
<ul style="list-style-type: none"> 『半日閑話』 『宴遊日記』 『燕石雑志』 『武江年表』 『鳩溪遺事』 『続飛鳥川』 『宝暦現来集』 など 	<ul style="list-style-type: none"> 「開帳仏細工物 とんだれいほう」 <div data-bbox="385 389 510 488" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">目録 材料・作り方</div>	<ul style="list-style-type: none"> 『三ヶ津伝来開帳富多霊宝略縁記』 <div data-bbox="602 389 734 488" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">略縁起の パロディ</div>	<ul style="list-style-type: none"> 『三宝利生初竹』 <div data-bbox="822 272 947 341" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">当時の流 行もの</div> <ul style="list-style-type: none"> 『龍都四国噂』 <div data-bbox="822 437 947 496" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">作品に応 用</div>

表 2

広小路に安永六年、開帳を見立てた「とんだ霊宝」の見世物が開かれました。

安永六（1777）年両国広小路の鯰橋源三郎考案のとんだ霊宝はただちに江戸の評判物になり、多くの記録に載せられています。当時の状況を伝える史料は、延広真治「烏亭焉馬年譜考証（その一）—未定稿—」^④に『半日閑話』、「烏亭焉馬年譜（二）」^⑤には、『鳩溪遺事』『武江年表』、比留間尚『江戸の開帳』^⑥には『続飛鳥川』『宝暦現来集』『燕石雑志』などが挙げられています。また、『宴遊日記』があります。それに、広告として作られた「開帳仏細工物 とんだれいほう」、「とんだ霊宝」の会場で売られた七丁仕立ての本『三ヶ津伝来開帳富多霊宝略縁記』、黄表紙『観音開帳 三宝利生初竹』（米山鼎峨作、鳥居清経画、安永六刊）、『龍都四国噂』（朋誠喜三二作、安永九（1780）年刊）があります。これを表にすると次のようです（表2）。

「とんだ霊宝」の開催期間

ここでまず、問題となるのが「とんだ霊宝」の開催期間です。朝倉無声『見世物研究』^⑦には安永六年春から安永七年春としています。上記の記録からその期間を検証してみましょう。「とんだ霊宝」が行われた年を安永六年とするのと安永七年とする二種類と天明五年とする『宝暦現来集』があります。記録

は次のようです。

○とんだ靈宝

先月頃より両国橋広小路にてとんだ靈宝のみせ物大流行す。

細工物宝物目録 細工人 鯰橋源三郎

古沢甚平

三尊仏

尊体飛魚、頭くしがい、後光ひだら、後光仏とこぶしの中にごまめのあだま、台座吸物わん。

不動明王

頭はさゞひ、頭はさけのあだま、手足体ともさけの塩引、御衣はびだこ、けさはこんぶ、剣はさしみ庖丁、ばくの絹はつるしなは、かゑんはかまくらゑび、岩座はさざひ、あわび。

役行者

頭手足とも干大こん、御衣わかめ、ひげはところの毛、御袈裟かぶり物はかんぴやう、しゃくぜうはするめの足、あしだは氷こんにやく、岩はからざげ。

後 鬼

頭よりはら迄かまがしら、手足はきす、こしまきはしゐだけ、おびはかんでん。

前 鬼

かまくらゑび、こしまきは椎だけ、よきはいじやくし、だいはからざげ。右の外しげゝれば略す。

目録みせ物場にて是をうる 開帳飛だ靈宝略縁起也焉馬述、本所相生丁大工和助事也

右、両国に三ヶ所、山下に二ヶ所出来る。(『半日閑話』^⑧)

○両国へ行、とんだ靈宝と幟出したる見せ物を見る、人叢分かたく木戸込合ふ、干魚・貝物等にて三尊弥陀・不動・役行者・鷹・龍・虎等を作り、細工

趣向感ずるに堪えたり、橋を渡り廻向院へ行、備中千体弥陀開帳の幟を立、南側に仏像あまた開帳（柳沢信鴻記『宴遊日記』^⑨安永六年（1777）四月六日記）

○安永七年の夏の頃、信濃なる善光寺の阿弥陀如来、これも回向院にてをがまれ給ひけり。近在近郷いへばさらなり。彼此なるわかきものども老いたるものども、あさまだきよりくるゝまでみな大念仏して、参る事いとへおびた夥しなどいふべうもあらず。兩國橋のあなたこなたに見せ物多く出けり。とんだれいほう靈宝と名づけてひをひもの乾魚乾物、何くれとなくとりあつめて仏をつくり、或はとりけだもの鳥獣の形を作りならべてみす。（『燕石雜誌』^⑩）

○有馬呑空君千石語予（筆者注。鈴木白藤）昔年我本所に在し時大工烏亭焉馬来りて、我厩の明きたるを五日か内借り小牛の黒きを牽来りて繋置きし、其所は、安永七年戊戌信濃善光寺開帳 于時開帳大に行れて、飛んだ靈宝とて■（欠字）にて申を（本ノママ）作り鬼娘とて鬼の様な娘を看物場に出す。草雙紙上るり本読本おとし咄物売不知数ヲ。予か十二次の時世也。（『鳩溪遺事』^⑪）

○安永七年六月朔日「同日より閏七月十六日まで、回向院にて、信州善光寺弥陀如来開帳、此時開帳繁盛して諸人群をなす、暁七時頃より棹の先に提灯多くともしつれて、高声に念佛を唱へて参詣するもの多し、平賀鳩溪烏亭焉馬が求によりて工夫をなし、小黒牛の脊に六字の名號をあらはし、見せものに出して利を得たりといふ。又鯰江源三郎・古沢甚平といふもの細工にて、飛んだ靈宝と号し、あらぬ物を見立て、仏菩薩などの形に作りたる見せもの、鬼娘と云へる見せものなど、いづれも見物多く賑ひしとぞ。庭云、此時鬼娘は、橋向にも似せもの出来て、是もはやる、飛んだ靈宝略縁起は焉馬述、このみせものはやりて、兩國に三ヶ所、山下に二ヶ所出来たり平賀源内が作、実生源氏金王桜といふ浄るりに、兩國鬼娘のみせ物を作りたり、この開帳の朝参りは、頓に禁ぜられたり（『武江年表』^⑫）

○安永の始、兩國に、とんだ靈宝といふ見世物を出し、殊の外の見物也、夫

より見世物追々多くなる（『続飛鳥川』¹³）

○天明五年、両国於二回向院一、嵯峨之釈迦開帳之節、両国にてとんだ靈宝と名附たる見世物出たりしが、さまへこの品ものを以て、小道具或は乾物を以て形ちを作り、から鮭にて三尊の弥陀、三味線の胴糸ばち駒を以て鎧兜之類、櫛笄墨筆させる煙草入等、何品と云事なく、さまへこの物を造り、其手際まことの正物と見え、扱々綺麗なる能き見世物珍敷物故、多分之利益有りと云へり、是よりしてさまへこの造物致しけれども、最前のごとくに見物も入らず、さまで評判もなし、（『宝曆現來集』¹⁴）

これを表にすると次のようになります（表3）。

資料	期間	関連開帳	焉馬述略縁起(安永六年刊)
『半日閑話』	安永六年三月より		みせ物場にて是をうる
『宴遊日記』	安永六年四月六日観覧		
『燕石雑誌』	安永七年の夏	善光寺	
『武江年表』	安永七年六月	善光寺	記述有り
『鳩溪遺事』	安永七年	善光寺	
『続飛鳥川』	安永の始		
『宝曆現來集』	天明五年	嵯峨釈迦	

表3

現在知られている上記の七つの資料には「とんだ靈宝」がいつ終わったかについての記録がありません。今までの研究は安永七年春に終わったとする『見世物研究』に従い、安永七年夏の「とんだ靈宝」を記憶の間違いとしてきました。しかし、安永七年春に終わったとする決定的な記録がない以上、『燕石雑誌』、『武江年表』、『鳩溪遺事』の三つの資料が間違いだとは思いません。安永六年三月二十日から始まって五月十日まで行われた浅草寺の観音開帳に当て込んで開催¹⁵し、大当たりを取ったので翌年六月朔から六十日間行われた善光寺開帳に合わせて行われたとみるのが妥当でしょう。

さらに、天明五年嵯峨釈迦開帳の時に「とんだ靈宝」が行われたとする『宝

『暦現来集』の記事も安永六年の記憶の間違いとしているのですが、これも間違いではありません。これは次の「おどけ開帳」の項で述べます。

目録と縁起

また、「とんだ靈宝」を宣伝する引札が残っています。これは馬琴の『燕石雑志』^⑬（図3）に入っていたので知られていたのですが、最近川添コレクションの一枚刷り（図4）^⑭が発見されて『燕石雑志』は当時の引札をそのまま刷ったことが分かりました（これをここからは「目録」と表記します）。細部における差はあるものの忠実に原本を伝えております。『燕石雑志』には左の匡郭の外に、「安永七年戊戌六月出」とあるのは、馬琴が目録を購入してからメモをしたのでしょう。

ここには「三尊仏さんぶつ」「不動明王ふどうみょうおう」「出山の釈伽如来しやか」「宝物鎧かぶとたものぎやう」「役行者やくじや」「後鬼ごき」「前鬼ぜんき」「目連の絵像もくれん」「とまり木二鷹たか」「龍虎古木梅りやうこ」の十の靈宝が紹介されています。

また、小冊もあります。これについては『半日閑話』で、「目録みせ物場にて是をうる 開帳飛だ靈宝略縁起也焉馬述」とあるのを見ると「とんだ靈宝」が行われた会場で売られたものです^⑮。

『三ヶ津伝来 開帳富多靈宝略縁記』（以下「縁起」と略します）は本尊とび魚の三尊と15の靈宝、「乾物役行者かんぶつやくじや」「後鬼ごき」「前鬼ぜんき」「塩引不動尊しほひきふどうそん」「胎内十月たいないとつき」



図3



図4

こやすのくわんおん い ぼしんまんのどう や え ぼ の た ち あまのちや こや う かいのていざう
 子安 観音「意馬心猿像」「八重歯之太刀」「小女茶屋小屋」「鶉飼 躰 像」
 じやう る り せ かい まん だ ら いぬがミ れい くほんのれんたい さねもりすいざうよろひかぶと あづまがた ごいん
 「浄瑠璃世界の曼荼羅」「犬神の霊」「九本蓮台」「実盛水牛 鎧 兜」「吾妻形御陰
 もん ちやりんとう あねいためうがう ざうのざる
 門」「茶輪塔」「船板名号」「真似 蔵 箴」合わせて16の靈宝の口上を述べてい
 ます。同じ「とんだ靈宝」を描いているのに共通のものは、三尊仏と不動、そ
 れに役行者や前鬼後鬼のみです。

目録に描かれた幟に書かれた口上には、「右目録之外追々細工出来次第御覽
 奉り入候」とあるので最初目録にあった見世物を追加していったことが推測で
 きます。目録は広告として作ったとすると一番最初の段階の「とんだ靈宝」の
 姿であるのでしょうか。「縁起」もとんだ靈宝の会場で売られたものなので全く
 違うものを出してはいないはずです。

この「縁起」は寺院の開帳の時に作られた略縁起をパロディしたもので以降
 の「展示型見立て」の口上に大きく影響しているのでここで翻刻をします。

きやうにいほくきよぶつほんくほんりきねんえんよくおじやう とう じ あんじ たてまつ ほんぞん
 經 曰 魚物本願 历年年欲 於 生、當時に案し奉る本尊ハあたじけなくも
 さかもり そん てんぢく きおん しやうじや な む お み と豆腐 りてん
 酒宴世尊、天竺祇園 精舎におゐて南無阿弥豆腐のおてんを説、利天にの
 ぼり給ひてハしつぽこ台の上に結跏趺坐し、一夏九旬のあひだ大食 饗応
 だい うへ けつ か ふ ざ いちげくしゆん たいしよくきやうおう
 経をときたまふ時に、五百のあらかんたち何卒しやうじんの如来をおがみ
 ぎやう ととき なにとぞ によらい
 奉らん事を願ふ。食尊ぐわんじとじてのたまふやう、汝等 精進の如来ハ
 たてまつ ねが しょくそん なんじら しやうじん によらい
 中へ 拝する事かたかるべし。なまぐさ如来をはいせよとのたまふ 御声と
 なか はい によらい ミこゑ
 もろとも ちやう き がつしやう いわしぐも うを さんぞん
 諸共に長跪合掌し給へば、ふしぎや鱗雲たな引、こくうをとび魚の三尊、
 くしこ ひだら ごくう しほもの
 串鮑のめんそう干鱈の御光あたりをか、やかし、いかう塩物くさくくんす
 れば、諸人門前しよにんもんぜんよつかいち
 四ヶ市をなし。ありがたや、ぶりがれんそくがれんとぞ
 となへける。今此所を天竺の四日市といふ。我朝 鮫鱈天皇の御宇干蛸寺
 わがちやうあんこうてんくわうざやう う ひだこじ
 の天蓋上人、此尊像を持来り。仏の御串鮑ハじやうこくじにおさめ、い
 てんがいしやうにん このそんざう もちきた ほとけ ミくしこ
 わつき如来と申す。一度拝する輩は酒盛如来の会座につくなり。下戸ハ茶
 によらい ひとたひはい ともがら さかもりによらい ま ざ げ こ ちや
 づけ さいほうしやう と べんたう に せ あんらく せん
 漬の西方浄土しやうゆでにしめ、弁当二世安樂をまもり給ふ。めうが銭
 どう むせん あらむし おそ
 八八銅づゝ。無銭の者ハたちところにお油虫となる。恐るべしつゝしむべし。

「とんだ霊宝」を描いた黄表紙

次に、とんだ霊宝から取材した黄表紙に『観音開帳 三宝利生初竹』（米山鼎巖作、鳥居清経画、安永六刊）¹⁹、『龍都四国噂』（朋誠喜三二作、安永九〈1780〉年刊）があります。『三宝利生初竹』は書名の角書が「観音開帳」とあるごとく浅草寺の観音開帳にあて込んだ際物で、浅草観音の霊験を賞賛する話の中に当時人気もののとんだ霊宝を織り込んだものです。七丁オモテの乾魚の不動明王・三尊仏がそれで、この絵は実際行われたとんだ霊宝の一面を窺うのに貴重な資料です。

この絵は今まで安永六年のとんだ霊宝が有名であるゆえに何回も紹介されました。袴姿の男が杖をもって乾物の不動明王を指しており、その隣がヒラメやサザエなどで作った三尊仏です。六丁ウラの場面は竹屋九兵衛が浅草観音に願かけて得た三人の娘を盗みだそうとして、三人の泥棒が一人は弘慶子、二人は念仏飴売りに変装するという設定です。弘慶子も念仏飴売りも安永期に流行ったもので、とんだ霊宝とともに当時の流行りものを見開きの一面に表した趣向です。念仏飴売りは一名あまいだ飴といわれました。これも仏事である念仏のパロディーです。ひとつの見開きに画面は半分に分けられているものの、同じ



図 5



図6



図7

く仏を滑稽の対象にしているのを読者に見せています。

これと同じ構成の見立絵が『絵本見立仮譬尽』²⁰⁾(竹杖為軽作、勝尾春政 画、天明三〈1783〉年)にあります。

○ 癩津貝しやくつ

ちやうせんこく　　かうけいし　　おらんが
朝鮮国にてハ弘慶子と名つく。阿蘭陀にてハ。キイミヨウダと云。此貝、
しやく　　づつう
癩　痞疔氣頭痛に用ゆべし。武州江戸浅草川のほとり田原町にあり。俗に弘
かいし
貝子といふは。詞のあやまりなり

絵は『三宝利生初竹』にも描かれている、弘慶子売りと念仏飴売りから取った絵です。弘慶子売りは、「てうせんのおこうけいし、しやくつかえにきんみやうだホホホ」と呼びながら売り歩きました。癩津貝は癩痞のもじりです。その癩痞によく効く弘慶子の売り口上を使い、また弘慶子売りが出没する田原町を貝の棲息地になぞらえました。讃である朱楽菅江の狂歌は、「しやくつ貝おして浦はのかうけいし　底も千尋の竹の皮笠」とあります²¹。

もうひとつ安永九（1780）年刊喜三二の『^{なつのみやし　こくうわき}龍都四国噂』²²があります。この黄表紙は説話「猿の生肝」と謡曲「海士」の龍宮と関係がある二つを織り交ぜにしたもので、とんだ靈宝も材料が乾物であることから結びつけたものです。

「面向不背玉」は歌舞伎でも上演されるもので江戸庶民には親しみのある主題です。唐から到来した、どこから見ても釈迦の正面が見える宝物でこれを本尊にして、当時流行のとんだ靈宝を展示しています。本尊である「面向不背玉」に参拝した後、左の「靈宝道」に入ります。靈宝道には「三尊仏」「塩引不動尊」「枯木二鷹」などがあります。飛魚は自分の祖先が三尊仏になったので喜び、鯰（ほら）は「おらが親父は仏にはならで、鷹になられた。哀しや〜」と泣いています。「海女」からの連想で面向不背の玉が本尊になり、とんだ靈宝が魚の乾物でできた靈宝なので竜宮の仏になったのです。見世物「とんだ靈宝」から二年が過ぎたのですが、いまだに当時の人々に印象を残していたのでしょう。

「とんだ靈宝」の内部配置

安永六年「とんだ靈宝」の内部については詳細な記録はなく、前掲『龍都四



図 8



図 9

国尊』を通して一番先に本尊が配置され、その次に靈宝道に入るという開帳の構成に倣って配置されていることが分かります。

「とんだ靈宝」「おどけ開帳」の内部配置がよく描かれている絵本に『門帳』²³があります。この本は刊記がないので年代が分かりませんが、上方の絵本の形態を取っており、本文で書かれた言葉にも上方方言が多く使われています。

先ず、一丁オモテ（図8）に入口が描かれており、入口の前には立札が立っています。老人が、「おびたゝしいまいりじや」と言いながら出てきます。出口として「下向道」があるので、この老人は見物途中疲れて出てきたのでしょう。その前を入って行こうとする人は、子どもの手を引いて入る女性や杖を突き手に数珠を持っている年老いた信心深い老婆などで、老若男女が入っていく姿が描かれています。一丁ウラと二丁オモテの見開き（図9）には、この寺の開祖道喜上人の尊像と開山近松師の掛軸が掛けられており、僧侶が竹の杖を持って絵解きをしています。

左下には、「御ゑんぎばん付は六錢で出ます」と声をかける二人組みの男性が立っています。左の人は手に刷物を持っており、右の人はざると袋を持ってお金を取るのでしょうか。これが「縁起番付」という名称で呼ばれたことと値段

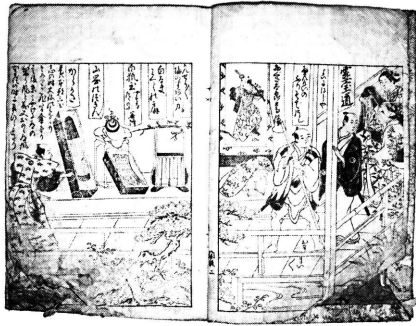


図 10



図 11

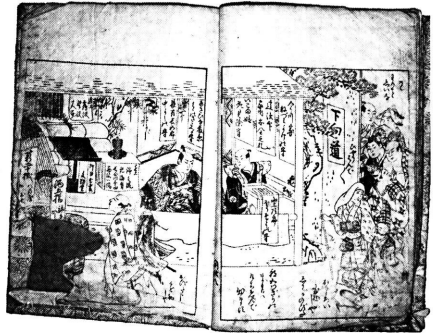


図 12

が六銭であったことが分かる重要な記録です。

本尊を過ぎるとその次は「靈宝道」(図 10) です。棒を持って立っている男性が、「押すまい〜」と整理をしている中、見物客が細い縁側を渡っていきます。ここから開帳の宝を展示する「靈宝道」です。「靈宝道」の展示物を見終わると別料金を受け取る「内靈宝」(図 11) があります。詞書きに、「通り切手ハ中木戸にてうけとります」とあるごとく、門の中の袴服装の人が入っていこうとする僧侶風の人から切手を受け取っています。

全部見終わって外に出るのが「下向道」(図 12) です。ここにまたお守りを売っている場所があります。このように、入口(高札) ⇒ 本尊 ⇒ 靈宝道 ⇒ 内靈宝 ⇒ 下向道と進む開帳と全く同じ配置です。

開帳の世俗化

開帳は仏の靈験をいただくための宗教的な行事でした。その開帳の行事をパロディする「とんだ靈宝」は、仏教で一番忌み嫌う生臭物をして仏像を作るといふいかにも不敬な行為です。「とんだ靈宝」より約十年ぐらい前に出版された『当世穴さがし』（穎齋主人作、明和六〈1769〉）には、嵯峨釈迦の言葉として、「近來は、かい帳に呼出しては、しゆへつくりものの作物をこしらへて、開帳をば見せ物しばいの様にしてしまい、むすめ子や若後家は、ごけ参けいしても愚僧をば見付ず、わし驚やそてつの作物に、気をぬかれています」とあります。開帳に見物客を呼び寄せるために本物の靈宝ではなく、作り物まで展示していました。

この傾向は川柳にも窺え、「靈宝のよろひがちっと見知り越」（川柳評万句合、宝暦九〈1759〉年梅）、「靈宝に幾度出たとおぼし召」（『象の鼻』四、明和七〈1770〉年）などは開帳する寺院の靈宝が何回も他の開帳に出品されたことを諷刺しています。

このような世態を風刺した黄表紙に『世上洒落見絵図』（菊亭主人＝山東京伝画、寛政三〈1791〉年、図13）²⁴があります。

今時は、開帳なぞも、信心で参る者は少なく、やれ水茶屋によい娘が出る



図 13

の、取持に役者が出るの、といふ評判を聞き、それを見に参詣する事なれば、畢竟、本尊はあり甲斐なしにて、無くても済むものと、これらも大洒落に洒落てきて、本尊はかたから止めにし、正面に美しい娘と色男を立たせ置き、又、靈宝はまだない〜といふて、これも止めにし、又、愛敬の守りや、運の守りくらゐはまだな事と、女郎買に行と、初会から惚れられて、あつちから身上りをして呼ぶ守りや、富を付ると、一ちの富、二の富、突止めまで壱人でせしめる守りや、百兩の支度金で嫁に行、お妾に住んで、御世継を産む守りを出しければ、老若男女貴賤群衆して参詣する。何とマア、洒落た世の中にあらずや。

「とんだ靈宝」までは行かないとしても当時の開帳に対しての江戸庶民の受け止め方が分かります。開帳とは一種の仏事で、寺院の宝物を一般に公開するのが目的でした。それが江戸時代盛んに行われるにつれ、本来の目的が失われ、参拝客を集めることだけに重点を置く寺院が現れました。そして、開帳の大当たりを図るため、ずいぶんでたらめな宝物を出すようになったようです。こういう雰囲気の中で「とんだ靈宝」が生まれたのです。

「おどけ開帳」の始まり

とんだ靈宝は安永七年を終わりに見世物として行われることはなかったとされています。そのかわり「おどけ開帳」が見世物として登場します。

『せつよう きかん撰陽奇観』(浜松歌国編著、天保四(1833)年成)²⁵ 三十九卷、天明七(1787)年四月の条には、

内平野町神明神主宅ニ而造り物開長 おどけ縁起 絵本別ニアリ 去々年巳四月生玉正遷宮の節氏地ニ作りもの多し其節船越町御祓筋東ニておどけ縁起作り物開帳あり是おどけ開長の権輿にして後年ニワカ師の連中所々にて興行に及ふ事とは成りぬ

とあります。これによると、おどけ開帳は天明五年四月船越町御祓筋東で行われたのが初めてだったこととなります²⁶。

名称としては、「造り物開帳」「おどけ縁起」「おどけ開帳」が使われています。「造り物開帳」とは細工作り物としての性格があったことからの名称でしょう。

ここで再び前「とんだ靈宝」で引用した『宝暦現来集』を見ましょう。「天明五年、両国於二回向院一、嵯峨之釈迦開帳之節、両国にてとんだ靈宝と名附たる見世物出たり」とあります。天明五年江戸での嵯峨釈迦の開帳を「江戸の開帳」から調べますと、六月朔日から六十日間、嵯峨清凉寺の開帳が行われました。さらに、「さまへみの品ものを以て、小道具或は乾物を以て形ちを作り、から鮭にて三尊の弥陀、三味線の胴糸ばち駒を以て鎧兜之類、櫛笄墨筆きせる煙草入等、何品と云事なく、さまへみの物を造り、其手際まことの正物と見え、扱々綺麗なる能き見世物珍敷物故、多分之利益有り」と続きます。この乾物だけでなく小道具を利用して作り物を仕上げる手法はまさに「おどけ開帳」そのものです。それに「から鮭にて三尊の弥陀」とは天明七年四月の本尊である「海中出現 乾鮭地藏尊」と非常に似ています。天明五年四月大阪で「おどけ開帳」を開催した後、急いで江戸へ行き六月に両国で「とんだ靈宝」を開いたことが推測出来ます。もし、同じものだとすると、大阪では「おどけ縁起作り物開帳」と呼ばれたのが江戸では「とんだ靈宝」と呼ばれたということが興味深いです。

海中出現 乾鮭地藏尊

『摂陽奇観』には会場で売られたと思われる絵本『造物^{つくりもの}噺^{はなし}の種^{たね}』（天明七年刊、細工者免独齋喜三二、作者紫霍、浪花亀耳堂板）が貼付されているのでその面影を窺うことができます。本尊「海中出現 乾鮭地藏尊」（図14）は、体は乾鮭、袈裟は干し鰯、錫杖は乾鮑^{つりかい}、珠はさざえ、蓮台は貝というふうな、安永六年江戸両国広小路で開かれた「とんだ靈宝」と同じく乾物の靈宝です。



図 14

詞書は次のようです。

忝も此由来を尋るに、人魚・^{ほぜ}鯨・^{ちぬ}海鯽・^{たい}鯛・^{あんこ}鮫・鮫鯨天皇の御宇、^{ほうほう}魴鯉年中に、
 松前の辺にて常に紫雲棚引しが、時の帝是を^{みかど}あやしミ給ひ、^{すずき}鱸中納言海老
 かれ^{めいじ}卿に命事、ことのしつぶを^{ただ}糾すべしとの給へハ、海老かれ^{ちよくめいかむ}卿 勅命蒙
 り、彼地へ^{かいてい}馳下り、海底へ網を入させしが、不思議成かな、光明か、やき、
 此尊魚出現し給ひしにより、すぐさま禁庭へつけ知らせ、^{えいらん}覧にそなへ奉
 りしが、帝きいの思ひをなし、誠に是社我念ずる軀の乾鮭地蔵菩薩の尊鯛
 也と、慶観な、めならず、当山へあんちし奉り、豊年寺本尊とならせ玉ひ
 し也。開山細工上人、ある夜ふしきの霊夢を蒙り、此尊魚枕元に立せ玉ひ
 てのたまわく、諸人我を一ト度はみする輩ハ、ひへしつの難をまぬかれ、
 諸人愛きやう酒ゑんのめどを通し、家内家業の肋とならしめ玉ハんとの御
 誓願て御座る。

開帳には靈宝・靈仏の展示とともにその縁起が述べられました。たとえば、「人皇三十代欽明天皇の御宇十三年」（『善光寺如来路縁起』）、「人皇六十四代円

融院の御宇永観元年（『城州嵯峨清涼寺栴檀瑞像三国伝来路縁起』）のような年代を、「人魚・^{はげ}鯨・^{ちぬ}海鯽・^{たい}鯛・^{あんこ}鮫鱈天皇の御宇、^{ほうほう}魴鯈年中」ともじております。海底から網に上がるというのは、隅田川で漁師の網にかかった浅草寺観音の縁起と類似しています。また、夢のお告げも縁起類によく登場する話です。本物の縁起を模倣してそれらしく口上を述べるのが、この「おどけ縁起」のおもしろさです。

しかし、その後の「愛染明王」を見ると、「はじかみ也。^{かう}御光大盃、御台座^{とさん}止蓋、其外土蓋盃イロへ」と乾物にこだわらず、いろいろな材料を使っています。

「おどけ開帳」の全盛期

その次、四十一巻、寛政三（1791）年の部には、

一 四五月の頃 所々におどけ縁記造りもの開長流行

はくろう町稻荷 天満天神 神明 あみだ池 座摩 御霊 八幡 上之
宮右おどけ縁記の繪本評判等別卷ニアリ

とあります。大阪で八ヶ所で同時に「おどけ開帳」が行われる、空前絶後の盛況振りです。

添付されているのは、『絵入稻荷造物縁起書』（細工方世話人、大江宇兵衛）、『絵入天満天神造物略縁起』、『奉納阿弥陀池造物縁起書』（細工人、大江宇兵衛）、『邪羅の開帳』の絵本4冊と、二枚摺りの『諸人開帳参詣人縁起』、それに評判記風の『大評判作り物開帳』が一冊です。

『大評判作り物開帳』（図15）には、上の上之宮を除いた七つの寺社での出し物が番付として順位を決めて並べられています。全194個の霊宝が「神躰之部」「仏像之部」「掛物之部」「宝物之部」「珠玉之部」「香炉之部」「冠之部」「鎧之部」「剣之部」「履物之部」などの部に分けられています。絵本が残ってい



図 15



図 16

るのはその中でも稲荷、天満、あみだ池なのでこの三つから順位の高い靈宝を
 みましよう。先ず、「神軀之部」には、提灯で作った「閻天帝」、酒道具で作っ
 った「酒内宿禰」、火鉢で作った「大黒天」、杓子で作った「高入道」と続きます。

『絵入天満天神造物略縁起』に描かれた「高入道」(図 16) の口上は、「これ
 なる高入道は近江の国おたが大明神作也。諸人を悩ませるゆへ高入道大明神と

崇め店ざらしをもつて手すから作り給ひ時の歌に、たか杓子わが名をいふてまねく人に いつくの人やわしも神にや いづれもちかふよつて招かれぬ。ご用心をなされませう」とあります。背の高い坊主頭の化物の高入道を杓子で作ったものです。

次に「仏像之部」の真上上吉「愛染明王」（『絵入稲荷造物縁起書』）の口上は次のようなものです。

壇上に敬ひ奉る愛染明王の其根を尋るに摂州加古川に磯兵衛といへる侍、式夜濱辺を通りし所、海上に光明かくやくとして異香四方に薫じ、奇異の思ひをなし、漁師を頼ミ、網にて引上、我宿の本尊と敬ひ信心怠らず祈念せしに磯兵衛に愛敬を玉はる。しかれば本尊の志によりし磯兵衛ゆへ加古川の磯兵衛とは云ず、本尊の磯兵衛へとて我異名とは成にき。是によつて磯兵衛も有難さのあまりに名を改、加古川本尊と申しける。本尊老年故、智力弥に此明王を譲り、大星に愛敬の有事諸人の知所にて忠臣蔵同講釈幾度出しても時花には愛染明王の守らせ玉ふ愛敬の徳也。大星が夜討に持参せし弓矢は此明王の御手にもたせられし神通の弓方便の矢をかりしもの也。又本蔵よりむこ引出に力弥へわたせし諸図の一卷も明王の御手に是あり。其時の本蔵が内に雨戸に愛染問くろくと申せしもこの愛染明王の御事にてござる。

ここでは「愛染明王」を「忠臣蔵」と関係付けて話しています。

演舌人の登場

『絵入稲荷造物縁起書』は靈宝を一つ一つ杖で指しながら口上を述べる形式を取っています。その口上を述べている人物に名前の表記がされており、弁連、玉治、べつ甲、御長、心子、三村、車マ、新太、八百太、松清、シゲの十一人ですが、『開帳おどけ仮手本忠臣蔵』（文化五年序）²⁷、『忠臣蔵縁起式』（村上



図 17

某、文化十四年（1817）刊、図17）の演舌人は竹履、重納、シゲ、湯桶、五徳、袖岡、弁連です。弁連、シゲの二人の人物が重なっています。『撰陽奇観』巻四十五、文化十三年の記事には、「ニワカ名人 弁連死 弁連は俄二名高く西本願寺門跡大坂下向之節其名を聞及ひ給ひ所望あつて俄二番つとむ生質廉直なる一奇人也」とあります。また『撰陽奇観』巻四十二、寛政八年の記事には、「足芸 吾妻吉五郎大当り 正徳の頃にも足芸するもの有し事、山王権現八千代玉垣といふ戯文に、足で芸する金太夫、奇妙な者と存じたが、まだへ夫より我貌は、といふ分段あり、吉五郎の足芸、達磨男己来の珍らしき事とて見物大入す、其頃シゲとかいへる俄師其身不具ならざるに足芸を真似して妙を得たりこれも又奇也」とシゲの足芸もうまかったことを伝えています。俄師がいろいろな見世物に携わっていたことが分かります。

『撰陽奇観』、『猿猴庵日記』²⁸、『見世物雑誌』²⁹、『年代記』³⁰ などから分かる「とんだ霊宝」「おどけ開帳」の開催時期を整理すると次のようです（表4）。

年 月	場 所	細工・絵解	種 類	典 拠
安永六(1777)年三月	両国回向院(江戸)	鯨橋源三郎・古沢甚平	とんだ霊宝	半日閑話など
天明五(1785)年四月	船越町御祓筋東(大阪)	不明	おどけ開帳	摂陽奇観
天明五(1785)年六月	両国回向院(江戸)	不明	とんだ霊宝	宝暦現来集
天明七(1787)年四月	内平野町神明神主宅(大阪)	紫鶴	おどけ開帳	摂陽奇観
寛政三(1791)年四月	博労町稲荷、天満天神、神明、阿弥陀池、座摩、御霊、八幡、上之宮の八ヶ所(大阪)		おどけ開帳	摂陽奇観
寛政九(1796)年四月	博労町稲荷(大阪)	中山文七	開帳の造り物	年代記
文化元(1804)年二月	大須門前(名古屋)	鯨橋源三郎	とんだ霊宝	猿猴庵日記
文化五(1808)年八月	清寿院(名古屋)		四十七士おどけ開帳	猿猴庵日記
文化八(1811)年三月	北野太融寺前(大阪)	呑龍	おどけ開帳	摂陽奇観
文化九(1812)年十月	大須門前(名古屋)	呑龍	おどけ開帳	猿猴庵日記
文化十(1813)年八月	清寿院境内(名古屋)	呑龍	おどけ法談	猿猴庵日記
文政元(1818)年正月	柳葉師(名古屋)		おどけ講釈	猿猴庵日記
文政元(1818)年六月	柳葉師広小路(名古屋)	天口斎玉珉	おどけ開帳	猿猴庵日記
文政五(1822)年三月	難波新地(大阪)	土瓶亭・呑龍亭	璃寛如来おどけ開帳	摂陽奇観
文政八(1825)年四月	大須山門外(名古屋)		離甌如来おどけ開帳	見世物雑誌、猿猴庵日記
文政十三(1827)年七月	清寿院境内(名古屋)	玉亭呑山等	おどけ開帳	見世物雑誌
天保四(1833)年二月	清寿院入口(名古屋)	吾妻春吉等	十蔵如来おどけ開帳	見世物雑誌
弘化三(1846)年三月	法善寺(大阪)	花山長硯	おどけ開帳	近來年代記
弘化三(1846)年八月	博労町稲荷(大阪)		おどけ開帳	近來年代記
嘉永二(1849)年二月	四天王寺(大阪)	新樂・南玉など	おどけ開帳	近來年代記

表 4

表からみても分かるように「おどけ霊宝」が世に現れた安永六年以降、幕末まで間断なく続きます。その間の特徴としては『見世物研究』では呑龍の登場と文政年間の歌舞伎役者の没後追善のおどけ開帳を特筆しています。もともと清涼寺の僧侶であった呑龍が開帳の折の人気によって俗人に戻り、見世物師になり、よりによって「おどけ開帳」の絵解きになって大喝采を浴びるようにな

ります。聖なる開帳を務めた僧侶が見世物師として移動するのも面白いです。

作り物忠臣蔵開帳

「作り物忠臣蔵開帳」は、大田南畝作、安永三年二月の「稲荷三十三社巡拝御詠歌」^④にも載っています。その内容は、

一番 白銀町 白旗稲荷
源九郎狐と見へてみやしろのほとりにたてししらはたいなり

二番 本町二丁目 三吉稲荷
伴頭となら□にとある神垣の名さへ丁稚の三吉いなり
作り物、相撲木戸の体 松本幸四郎、市川門之助角力、行司市川海老蔵作り物なり
同奥庭に二間茶屋の体。釈迦が嶽酒宴の体。

三番 浮世小路 福德稲荷
さまへみの浮世笑止な願をもきゝわけ給ふくいなり
作り物忠臣蔵開帳

- 一番 大星由良之助、刀一腰、絵図一枚
- 二番 同力弥、鏝一筋、文箱一つ
- 三番 加古川本蔵、網笠一がい、尺八一本
- 四番 おかる、かんざし一本
- 五番 早野勘平、鉄砲一挺、蓑笠
- 六番 寺岡平右衛門、袴一具
- 七番 天川屋義平、大福帳一冊

——以下略——

とあります。上の記述は名称だけが表記されているので、「作り物忠臣蔵開帳」なるものの詳細は分かりません。ただ、作り物とあるので趣向を凝らして忠臣蔵の名物を作って観客を集めたのでしょう。忠臣蔵は一般の人々に広く知

れ渡ったものとして、こういう見立ての開帳を開くときにもわかりやすかったに違いありません。

「作り物忠臣蔵開帳」の記録は上の表にあるように、『猿猴庵日記』（高力猿猴庵、明和九年～文政十一年）に見えます。その文化五年の条には、「○清寿院にて、おどけ開帳之見せ物有、四十七人之道具にて寄せ見立物也。シワノセンダクジと、立札も地口にて立る。面白き見せ物なり。」とあります。この見世物が八月に行われ、九月二十日から弥陀寺より芝泉岳寺「靈宝開帳」が開催されたことを記録しています。おどけ開帳と本当の芝の泉岳寺開帳の開催期間が非常に近いのが興味深いです。おどけ開帳のほうが、泉岳寺開帳の開かれる時をねらったのでしょうか。

この「忠臣蔵おどけ開帳」を描いたものと思われる『絵入おどけ造物開帳』（図18）という絵本があります³²。三月三日より大阪高津御社内で行われたと書かれています。猿猴庵が記録している名古屋清寿院の「おどけ開帳」が八月なのでそれより5ヵ月早いことになります。この絵本にも絵解きをしている演説人が描かれています。演説人が七人で、前「演説人の登場」で扱った『開帳おどけ仮手本忠臣蔵』と全く同じです。出品された作り物もほとんど同じで、同一の「おどけ開帳」を描いたのでしょうか。



図 18

会場では絵本が売られたのですが、このおどけ開帳は『開帳おどけ仮手本忠臣蔵』か出版されています。『開帳おどけ仮手本忠臣蔵』はおどけ開帳の会場で販売した小冊ではなく、上下二巻、四十一丁に至る正式に出版された本です。扱った作り物は二十三の霊宝で、絵より文章に重点をおいています。見世物「おどけ開帳」の滑稽本バージョンで口上の読み物化を図った本です。

おどけ忠臣蔵開帳の戯作作品

おどけ忠臣蔵を描いた戯作作品は次のようです。

『搦師直開帳』（十返舎一九、寛政九〈1797〉年刊）

『開帳おどけ仮手本忠臣蔵』（文化五〈1808〉年序）

『忠臣蔵縁起式』（村上某、文化十四〈1817〉年刊）

『宝合勢貢之蔵入』（林屋正蔵、天保八〈1837〉年刊）

『忠臣裏皮肉論』（一筆庵主人作、嘉永元〈1848〉年序）

『忠臣蔵宝物道化縁起』（万亭応賀、嘉永期）

黄表紙『搦師直開帳』（図19）の粗筋は次のようです。



図 19

死んだ師直が地獄・極楽を廻り、見物する。地獄では本蔵から進物を受け
てもそれには火がついて取れない。これを「物を取らんとし取られぬを
手を焼いたといふハ地獄よりいでたる言葉なり」とこじつける。剣の山で
顔世御前に逢ってくどき、一緒の部屋に入るが、顔世御前の身からも火が
出る。師直は逃げながら、「不動様のかみさんか、清盛殿の妾ではないか。
われらハ猫舌、熱いときてはごめん〜」という。一九らしい滑稽である。
極楽では塩谷判官が四十七の忠臣に手伝われ、質屋をして繁盛する。師直
はみすばらしい姿で、娑婆で浪士になっている弟師安の所に現れる。師安
に、金主を拵え師直家の宝物を開帳し、その散物を自分に送ることを頼む。
その金で商売をして塩谷判官と肩を並べたいということである。そして師
直の開帳が開かれるのである。

ここでは忠臣蔵の小道具に関心が向けられています。忠臣蔵の道具に着目し
た黄表紙はすでに天明八年刊『義士之筆力』（山東京伝作・政てる画）から始
まります。これは忠臣蔵の小道具の役者に対する反乱とも言うべきものです。

『掬師直開帳』は歌舞伎で上演された十一段目の師直に関係あるものを展示
しています。『掬師直開帳』の開帳の図（図 20、21）は、一九死後幕末に二枚
続きが作られました³³。詞書まで全く同じです。絵の中から面白いのを一、二



図 20

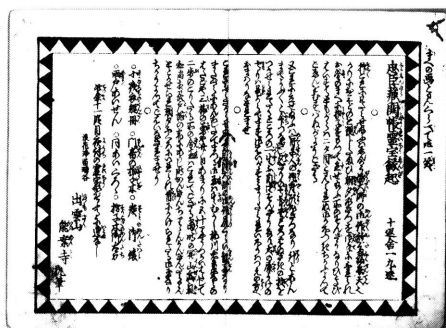


図 21

見てみましょう。右の「於多福弁天」は詞書には、「これにわたらせ給ふハゑんかうほうだいしの御さくおたふくべんてん也。かりにおさんどのとげんじ給いてあさゆふぼさつを御てにふれられおかまのまへにしやくしをもつてたゝせたまふ所のそんぞう也」と台所の飯炊き女を弁天に見立てていますが、忠臣蔵でこの女が登場するのは十一段師直邸内の乱闘場面です。夜半義士たちの奇襲によって師直側はうろたえてどたばた劇を演じます。

その他、忠臣蔵「展示型見立て」には、『開帳おどけ仮手本忠臣蔵』（文化五年序）、『忠臣蔵縁起式』（村上某、文化十四年〈1817〉刊）、『宝合勢貢之蔵入』（林屋正蔵、天保八年〈1837〉）、『忠臣裏皮肉論』（一筆庵主人作、嘉永元〈1848〉序）、『忠臣蔵宝物道化縁起』（万亭応賀、嘉永期）などがあります。

『宝合勢貢之蔵入』は三冊よりなり、主に上と中は忠臣蔵、下は七代目市川団十郎に関する霊仏・霊宝からなっています。「与一兵衛女房守本尊」、「天の与の此金有難猪之掛物」、「夜光乃二ツ玉」などが忠臣蔵関係の作り物です。この作品はなかなか人気があったせいか、後刷りで、改題本『昔々百夜斬』、前後二編に仕立て直した『戯霊宝』³⁴、一丁を増補（十四丁目）した『忠臣蔵道化縁起』と四度外題を替えて出版されました。

嘉永元年二月二十九日より、泉岳寺の開帳が開かれました。これをあて込んで『忠臣裏皮肉論』、『忠臣蔵宝物道化縁起』が出ます。『忠臣裏皮肉論』は上下の二編に構成され、上巻が泉岳寺でなく穿鑿事の開帳、下巻は忠臣蔵の人物略伝です。上巻の霊仏・霊宝は大序から十一段目まで歌舞伎の順番によって配置されているのが特徴です。『忠臣蔵宝物道化縁起』は刊記がないものの、改印が吉村と村松の双印³⁵であるゆえ、嘉永年刊と推測できます。序に泉岳寺開帳の立札が描かれていることから、元年か二年の刊行とされます。この作品も「身がわり松」、「九寸五分刀」、「おかるの身うり」など忠臣蔵をもとにした開帳の見立物です。

この作り物の忠臣蔵開帳は明治に入っても続きます。明治二年三代豊国の「洗作事とんだ霊宝」のような浮世絵³⁶、明治十年『団々珍聞』二十二（八月

十八日)、二十三号(八月二十五日)の「聚新蔵土用干」のように雑誌にまで見られます。忠臣蔵は歌舞伎では最多上演演目を誇るので、同時代の文芸に与えた影響は甚だしく、知り尽されたもののイメージの変換は、ささいなことまでその効果がすぐ見えるという点でよく使われるようになったのでしょう。

結び

この原稿は、私が1993年第16回国際日本文学研究集会で発表した「戯作における開帳の見立物研究——いわゆる「とんだ霊宝」の受容」が元になっております³⁷⁾。あの発表から18年という年月が過ぎて、その間間違いや新しい発見、新資料などが見つかりました。今回はそれを補いました。

今回の発表の意義は、まず1928年出版された朝倉無声『見世物研究』に記載されている「とんだ霊宝」の開催期間に疑問を發したことにあります。私もそれに基づいていたのでその間違いを正したいと思いました。次には、天明5年4月始まった「おどけ開帳」が同年江戸で「とんだ霊宝」として行われたことが分かったことです。これで同じものを大阪では「おどけ開帳」と呼び、江戸では「とんだ霊宝」と呼んでいたと推測できます。また、文化5年の「おどけ忠臣蔵開帳」を記録した絵本『おどけ造物開帳』と演説人の口上を読み物として出版された『開帳おどけ仮手本忠臣蔵』の位置づけができました³⁸⁾。

安永六年に始まった「とんだ霊宝」は新しい表現方法を提示し、長い間支持されてきました。見世物として幕末まで行われ、戯作においてもその方法が使われました。さらに浮世絵、一枚刷なども残されています。私は外国人として、これが非常に日本的なものであると考え、興味を持つようになり、研究を続けております³⁹⁾。

この論を書くにあたって延広真治、武井協三、大高洋司、山下則子、入口敦志、井田太郎先生にご教示を賜りました。また、貴重なご資料を提供していただきました川添祐、福原敏男先生及び各図版の所蔵先の図書館にも感謝致します。

【注】

- ①比留間尚「江戸の開帳」（西山松之助編『江戸町人の研究』（2巻）吉川弘文館、1973）の「開帳と文芸」の項に（p459）、

開帳に際して信者を対象に縁起が頒布されたことは、前述の高木豊の論文にも報告されているが、文芸作品にも同様の傾向が見られた。文芸の形式から黄表紙が最も適していたようで、そのほとんどは黄表紙によって占められているが、開帳を扱った作品は（1）田開帳寺社の縁起を通俗的に仕立てたもの、（2）開帳を茶化して洒落・地口・見立てといったもので滑稽化したもの、（3）開帳寺社を舞台にしながら、寺社そのものとは別の世界の嚙を展開させ、開帳仏の霊験によってめでたくおさまるといふものの三種に大別できる。

とある。ここで扱う「展示型見立て」は（2）に属するもので、主に黄表紙が多い。

- ②書名は国文学研究資料館の「記載書名」に従った。
- ③猿猴庵著、名古屋市博物館編集『泉涌寺霊宝拝見図・嵯峨霊仏開帳志』名古屋市博物館、2006.3より
- ④『独協大学教養諸学研究』3巻、1969
- ⑤『名古屋大学教養部紀要』第14集、1970
- ⑥吉川弘文館、1980
- ⑦思文閣出版、1977、春陽堂1928年刊の復刊
- ⑧濱田義一郎編、『大田南畝全集』、第11巻、岩波書店、1985。
- ⑨藝能史研究会編、『日本庶民文化史料集成 13 芸能記録』、1975
- ⑩『日本随筆全集』、第5巻 国民図書株式会社編国民図書、1927
- ⑪延広真治、「烏亭焉馬年譜（2）—未定稿」（『名古屋大教養部紀要』、14巻、1970）より。
- ⑫『武江年表』 斎藤月岑著；金子光晴校訂；1、2、平凡社、1968。（東洋文庫；116、118）
- ⑬『新燕石十種』、第5巻、中央公論社、1981
- ⑭『近世風俗見聞集』、続日本随筆大成 別巻 第7巻、吉川弘文館、2007
- ⑮前掲書『江戸の開帳』による。
- ⑯個人蔵
- ⑰川添コレクションの一枚刷りの大きさは、全体：410×300mm、匡郭：379×272mmである。大高本『燕石雑誌』の匡郭は、右143×197mm、左138×199mmである。引札を本に収めるとき大きさを小さくした。
- ⑱これについては、延広真治「烏亭焉馬年譜考証（その一）—未定稿一」（『独協大学教養諸学研究』3巻、1969.03）に詳しい。目録について次のような記述がある。
- 目録は馬琴蒐集の「返魂余紙別集」に張り込まれており（注一）、次のような説明がある。「安永七年の夏善光寺の阿弥陀回向院にておかまれ玉ひしとき両国橋の東詰へ出たる当時流行の観世物也。この外に縁起一冊ありそハ烏亭焉馬の作也縁起も予架蔵ス」。
- ⑲東京都立中央図書館加賀文庫蔵
- ⑳国文学研究資料館蔵
- ㉑『江戸見立本の研究』小林ふみ子編著、汲古書院、2006
- ㉒東京都立中央図書館蔵
- ㉓現在所在が確認されているのは、国文学研究資料館蔵、個人蔵、静岡大学付属図書館蔵の三つがある。刊記、板元などの書誌関係の情報がなく、三つとも形態が違っている。最も原型を保っていると思われるのは国文学研究資料館蔵本である。国文学研究資料館蔵本は題簽がなく、ノドに「開帳」と丁数が書かれているので整理書名は『開帳』になっている。題簽のある個人蔵本、静岡大学

付属図書館蔵本の題簽は同じ筆跡で「絵本霞の海」とある。国文学研究資料館蔵本の一丁になっているのが個人蔵本には半丁ずつ分けられて前後の表紙の裏に貼られている。静岡大学付属図書館蔵本は、三丁ウラから始まり九丁オモテで終わり、他の絵本三種類を集めて作っている。福原敏男「戯け開帳と縁起講釈」（堤邦彦・徳田和夫 編『寺社縁起の文化学』2005年・森話社）にこの本の解説や翻刻がなされている。

②4 東京都立中央図書館蔵

②5 『浪速叢書』（浪速叢書刊行會、1926；第1-第6）

②6 朝倉無声著『見世物研究』（思文閣出版、1977、春陽堂1928年刊の復刊）には、「おどけ開帳が初めて大阪で興行したのは寛政三年四月」とあるが、この記事によって天明五年とすべきである。

②7 大阪大学忍頂寺文庫蔵

②8 平山敏治郎、竹内利美、原田伴彦編、『日本庶民生活史料集成；第9巻』、三一書房、1969

②9 小寺玉晃著、郡司正勝・関山和夫編、三一書房、1991

③0 福原敏男「戯け開帳と縁起講釈」（堤邦彦・徳田和夫 編『寺社縁起の文化学』2005年・森話社）によって『年代記』『近來年代記』の存在が分かった。

③1 『大田南畝全集』（18巻）、岩波書店、1987

③2 この絵本は東京大学総合図書館霞亨文庫蔵書で、『風俗資料』として整理されている。『東京大学総合図書館霞亨文庫目録』（雄松堂書店、1982）からその書誌を見ると以下のようである。

貼込帖二帖丁数（乾） 一四面（坤） 一二面

折本 表紙 納戸色笹葉空押 二二・四×一五・四 mm

匡郭 不定 字高 不定 行数 不定

書外題 「風俗資料 乾（坤）」 左肩

内容（乾）「稲荷／造物縁記書／絶入」（細工方／世話人／大江宇兵衛／大坂心斎橋塩町角／本屋卯之助板／大坂淀屋橋南詰／倉橋屋 仁助）「おどけ造物／開帳」（大坂まつや町すじ塩善板）

「稲荷／造物縁記書／絶入」とは、寛政三年に行われた「おどけ開帳」の時に売られた『絵入稲荷造物縁起書』（『拱陽奇観』）と同一本である。

③3 この二枚の刷物は東京大学資料編纂所蔵の『番付集覧』によってその存在を分かった。写真は筆者蔵『江戸自慢』。

③4 『国書総目録』の所蔵欄には加賀文庫のみ記載されているが、加賀文庫本には後編しかない。後編裏表紙の見返しには、「前編は忠臣蔵義士の遺物を委細に著し、嵯峨釈尊の由来をおかしく作りたる」とある。

③5 『錦絵の改印の考証』（石井研堂、伊勢辰商店、1932年）による。

③6 この浮世絵は三枚綴りであろうと思われるが筆者が見たのは山本慶一氏所蔵の右の一枚である。残りの二枚は未見。鈴木重三氏より、この絵が三代広重画明治二年版で、明治二年四月の泉岳寺開帳に合わせて板行されたものであるとご教示をいただいた。

③7 「とんだ靈宝」から触発された「展示型見立」についての拙論は、この論文以外に、「画中に詩あり——山東京伝『呑込多靈宝縁起』から見た見立絵の方法」（『日本の美学』第22号1994年）、『造物趣向三種』太平書屋、1996年（太平文庫；37）がある。

③8 発表後、川端咲子・正木ゆみ「『開帳おどけ仮手本忠臣蔵』考—忍頂寺文庫本を出発点として—」（『忍頂寺文庫・小野文庫の研究2』、2006年度大阪大学大学院文学研究科共同研究（国文学研究資料館研究連携事業）研究成果報告書）が分った。『開帳おどけ仮手本忠臣蔵』について現在もっとも参考になる論文である。

- ㊸「とんだ靈宝」は外国人の関心を引く主題であるようで、Marquet Christophe 氏も「江戸の寺社開帳をパロディ化した見世物「とんだ靈宝」」（国際基督教大学アジア文化研究所『アジア文化研究』、別冊 18, 2010）を発表している。

図版目録

- 図 1 『開帳』（国文学研究資料館所蔵）
図 2 『嵯峨靈仏開帳志』（猿猴庵著、名古屋市博物館編集『泉涌寺靈宝拝見図・嵯峨靈仏開帳志』名古屋市博物館、2006. 3 より転載）
図 3 『燕石雑誌』（大高本）
図 4 「とんだれいほう 細工物宝物目録」（川添コレクション）
図 5 『観音開帳 三宝利生初竹』（都立中央図書館所蔵）
図 6 『絵本見立仮譬尽』（国文学研究資料館所蔵）
図 7 『龍都四国噂』（都立中央図書館所蔵）
図 8 『開帳』（国文学研究資料館所蔵）
図 9 『開帳』（国文学研究資料館所蔵）
図 10 『開帳』（国文学研究資料館所蔵）
図 11 『開帳』（国文学研究資料館所蔵）
図 12 『開帳』（国文学研究資料館所蔵）
図 13 『世上洒落見絵図』（都立中央図書館所蔵）
図 14 『摂陽奇観』（船越政一郎編『浪速叢書』浪速叢書刊行會、1926-1929 より転載）
図 15 『摂陽奇観』（船越政一郎編『浪速叢書』浪速叢書刊行會、1926-1929 より転載）
図 16 『摂陽奇観』（船越政一郎編『浪速叢書』浪速叢書刊行會、1926-1929 より転載）
図 17 『忠臣蔵縁起式』（国会図書館所蔵）
図 18 『風俗資料』（東京大学総合図書館霞亭文庫所蔵）
図 19 『搦師直開帳』（都立中央図書館所蔵）
図 20 『江戸自慢』（架蔵本）
図 21 『江戸自慢』（架蔵本）